

水女子大学教授による“Gender, Sexuality and Reproduction in Japan”で、まさにこれらのキーワードは最近社会学などでも注目されており、性科学の広がりを実感させるものであった。

最終日の特別講演(3)は、AFS もその一員である世界性科学連合 (World Association of Sexology) の会長をつとめるコールマン (Eli Coleman) 教授による“Progress and Prospect for Sexual Health and Sexual Rights in the New Millennium”であった。WAS は昨年香港における大会で「性の権利宣言」(Declaration of Sexual Rights) を採択したが、コールマン教授の講演はこの「宣言」の意義をわかりやすく説き、「性の健康と権利」の推進を訴えるもので、参加者一同に感銘を与えた。期せずして大会会長も WAS 会長も今世紀の人口学的変動を講演の導入としたが、このことは性科学と人口学の密接な関係を物語るものといえよう。

9つのシンポジウムの中でも“New Method of Contraception”と“Background of Induced Abortion”は人口問題との関連が強かった。前者は4つの国における4つの新しい避妊法(オーストラリア/RU486; 韓国/IUD; 日本/緊急避妊法; タイ/ノルプラント)の現状が述べられ興味深かった。後者はアジア諸国における人工妊娠中絶の背景を探るもので、フィリピン、中国、台湾(Lin Hui-Sheng 博士)からの報告と並んで、国立公衆衛生院の林謙治部長による韓国、中国などにおける出生性比の不均衡とその背後にある男児選好についての報告があった。

一般発表は19のカテゴリーからなる口演とポスター・セッションに分かれておこなわれ、本研究所の佐藤と岩澤は「避妊と家族計画」の分科会で第9回・第11回出生動向基本調査データをもとに日本人の避妊行動について報告した。この分科会では昨年の低用量ピル認可後もピルが普及しない現状に関連して、早乙女智子青山病院医師から産婦人科医師側の意識・態度調査結果が述べられ、座長の北村邦夫日本家族計画協会クリニック所長を交えて、日本でピルをはじめとする効果の高い避妊方法が普及しない原因について議論が交わされた。

また女性用コンドームが日本でも発売されたことを受けて、ランチョンミーティング「女性用コンドームの限界と可能性」が開かれ、避妊と性感染症予防の両方に女性が主体的に用いることのできる方法として新たに開発された女性用コンドームに大きな期待がかけられていることが分かった。

このように本大会は内容も多彩で社会的話題も豊富であったが、全体として医学・看護、性教育などの専門家が主で、社会科学方面の研究者の参加は少なかった。性現象(セクシュアリティ)と人口現象は元来相互に原因であり結果でもあるという裏腹の関係にあり、政策的見地からみても近年リプロダクティブ・ヘルス/ライツを基本概念として共有していることから、今後人口学と性科学の交流が進むことが望まれよう。次回は2001年6月に第15回世界性科学学会がパリで、2002年11月に第7回アジア性科学学会がシンガポールで開催される予定である。

(佐藤龍三郎記)